天地

ネットワークテーブル　536号

天地シニアネットワーク　2022. 10. 17

TENTI　TO DAY	『爺々放談』		1
会員の広場			2
調査　報告	我が町・秦野の歴史と現在（１）	北林文夫	3
日本　歴史	「了解日本（日本を知る）（3）中国文化から得られる心の糧	兪彭年	5
読　後　感	吉村昭一著「ポーツマス条約」を読んで（その2）	臺　一郎	8
事　務　局			１１

****

ＴＥＮＴＩ　ＴＯＤＡＹ

****

コロナ禍が落ち着いてきたので、機会があればなるべく出かけることにしました。家にいると動きが少なくなり、血流が悪くなるせいか散歩するのもしんどくなります。

****

９月下旬、かつての勤務先の同期会が有楽町でありました。男子大卒、同期入社は、７０人強いましたが、今回集まったのは１０人ほど、一気に寂しくなりました。アルコールは少なく、食事もあまり手付かず、来年もまた開こうと意気だけは高かったのですが、自然消滅となりそうな予感がします。

****

毎年、１０月の第一土曜日夜、奈良・興福寺で「塔影能」があり、１０月１日から２泊３日で奈良に出かけました。６月に神戸へ行きコロナに感染したので若干躊躇しましたが、今年が最後と思いきって出かけました。

「塔影能」は、興福寺の伝統行事、今年で29回目。右手に国宝・五重塔を見ながら正面に位置する東金堂に向かって能狂言が奉納される。今回は、「天鼓」を京観世の片山九郎右衛門師が演じましたが、古都奈良の夜、異次元を感じる貴重な時でした。明治初期、廃仏毀釈で廃寺に追い込まれた興福寺、その傷跡は外からは見えなくなりました。

****

奈良公園一帯の鹿、出会うのは雌鹿と今年生まれの子鹿だけ。成育した牡鹿は、この時期角切りされるので殆ど見ない。次週には「角切り式」が行われる。自然状態の動物と直接接することが出来るのは、世界でも奈良くらいとのこと。観光客は修学旅行生だけが目立ったが、これから外人観光客が増える。鹿も「鹿せんべい」にありつく機会が増えて喜ぶでしょう。

****

爺々放談

****

北朝鮮がミサイルの発射実験を活発に行っていますが、日本の上空を飛び越える長距離ミサイル弾道弾は、２０１７年以来とのこと。経済状態が極度に悪化していると伝えられている中での連続発射実験、異常に感じます。天地ネットワークテーブル２０１７年８月号「TENTITODAY」に、こんなコメントがのっていました。**「安倍政権が国内問題で窮地に立つと、北朝鮮のミサイルが打ちあがる」。現在の岸田政権、旧統一教会問題で、窮地に追い込まれています。どこか、似ているように見えてなりません。**

****

旧統一教会と北朝鮮との関係については、よく分かりませんが、「統一」には、朝鮮半島の統一という意味もあるようです。自民党の中枢議員が、旧統一教会と密接な関係があると明らかになり、岸田首相がその対応に苦慮しているようです。これからも大事ですが、政策面でこれまでにどのくらいの影響を受けているか、精査も必要です。

北朝鮮のミサイル発射実験は、旧統一教会と縁切りすると動き出した岸田政権、自民党への牽制球、警告のようにもとれます。まさかと言われそうですが、そのように考えることを、非現実的と切り捨てるのも不可能のように見えます。

****

テレビ朝日、「羽鳥モーニングショー」に登場する、社員でレギュラーコメンテーターをつとめる玉川徹氏が、謹慎中となり問題となっています。発端となった菅元首相の弔辞、当日聞いていて、安倍首相との交流は、心情が良く伝わり感動的でしたが、故人の読みかけの本、そこにあった辞世の短歌と続いた時には、第三者の手が入っていると途端に気分がダウンしました。国葬のような大儀式には、イベントの専門会社がつくのは当然。玉川氏の「電通」発言は、前後からして意図的なものでなく、「思い違いでした。お詫びします」で済む話のように思える。

ときどき、軽率な発言はあるが、周囲を気にせずにずばり核心を突く鋭さは、貴重で教えられるところが多い。また、それを裏づける調査力は、発言内容の信用に繋がる。彼のようなタイプを受け入れられるかどうか、日本の度量が試される。嘘をついても、それを認めず、言い訳をするのが当たり前という日本の現代の風潮、こちらの方が問題としては大きい。ためにする反対は、止めた方がよい。

****

円が32年ぶりの１４８円台をつけてきました。アメリカ経済の勢いが止まりませんので、FRBの利上げスタンスは変わらず、ドル高、円安がさらに進みそうです。気になるのは、ウクライナ戦争。長引くと軍需産業の特需が起きることが予想されます。その結果、アメリカの雇用は逼迫、経済はさらに過熱化するのではないでしょうか。日本は、

輸入価格の上昇で物価が上がり、一方人出不足で生産性が上がらないので収入は減り、財政も国債の過剰発行で身動きとれず、八方ふさがりになりそうです。頼みは、外人観光客のみということになるのでしょうか。

****

会　員　の　広　場

****

我が町・秦野の歴史と現在　（1）　　北林文夫（85歳）

自然災害はその多くが地学関係にあると言えます。（火山噴火の噴石、火山灰、火砕流）、（地震・その津波による地割れ、地盤沈下、陥没、崩落、液状化、家屋など建造物の倒壊、火災）、（台風、集中豪雨、高潮などによる洪水、氾濫）、（突風・竜巻による建造物の倒壊）、（大雪、猛暑、冷夏、干ばつ）、（隕石落下、太陽フレアから磁気嵐、通信障害、その他）、（大気・水質・土壌汚染）、（ウィルスなど病原体感染）、など多岐にわたります。

　地学を学ぶことは、地球を知り、地上の災害を学ぶことにもなります。自然豊かな秦野（はだの）の大地に興味を持ち、その成り立ちと現在の姿を知ることは、有意義なことと考え、「学習ノート」秦野ジオサイトをまとめてみました。

秦野の地形、地質の概略

秦野はプレートテクトニスというユーラシアプレート、北アメリカプレート、太平洋プレート、フィリピン海プレートの接する地域にあります。さらに日本を東西に分けるフォッサマグナの南部地域にあります。

西には富士山、箱根火山など火山があり、秦野に火山灰が降下して、ローム層（立川、武蔵野、下末吉、多摩）を堆積しました。その西に糸魚川・静岡構造線と南アルプスを挟んで中央構造線の大断層帯があります。

南には相模湾に相模トラフ、そして伊豆半島を挟んで駿河トラフがフォッサマグナの東側と西側にそれぞれ繋がっています。近辺の断層には、神縄、・国府津・松田断層帯、伊勢原断層、北伊豆断層帯、市内は、秦野断層、その副断層、渋沢東・西断層などがあります。秦野はまさに震源地域の上に位置するといえます。

北側は丹沢山地があり、南の海底火山からできた小島がフィリピン海プレートの上にのって移動し本州に衝突、隆起して山地となったものです。引き続き伊豆半島が衝突し丹沢山地をさらに隆起させました。表丹沢でも、海底でできた枕状溶岩が見られます。丹沢、盆地の基盤は海底で堆積した凝灰岩でグリーンタフと言われています。

秦野盆地は、丹沢山地と大磯、渋沢丘陵に囲まれています。市内は丹沢山地を源に金目川、葛葉川、水無川、四十八瀬川、渋沢丘陵に沿って室川、弘法山を源に大根川の6河川が流れています。これらの河川は丹沢から大量の砂礫を運搬して扇状地や河岸段丘を形成して景観を豊かなものにしています。

盆地は山や丘陵地に囲まれ、地下は地下水盆となって芦ノ湖の4倍の7．5億㎥の地下水を貯溜しています。このため市内、丹沢麓には20個所と多くの湧水地があり、秦野湧水群として全国「名水選」になっています。桜18種類、湧水量一日約2500tの今泉名水桜公園などの親水公園もあります。

葛葉川ふるさと峡谷は、秦野断層の逆断層で隆起、盆地には珍しい深い谷と蛇行する九沢といわれる沢が見られます。また箱根の噴火によって堆積した火山灰の11万年前頃の地層、吉澤層を見ることができます。

渋沢丘陵には、峠の鉱山や令和3年、国の登録記念物に登録された関東大震災の震災遺構で、崖崩れで市木沢を埋めて生まれた堰止め湖、「震生瑚」があります。

秦野の誇りは、明治時代、「近代水道施設・曽屋水道」が全国で3番目に市民により竣工されたことです。曽屋水道は平成29年に国の登録記念物に登録され、令和2年には曽屋水道記念公園が整備されています。秦野は、盆地ですが、山、丘陵、川、地下水、湧水、断層、箱根・富士の火山のローム層、登録記念物、など多くのジオサイトがコンパクトに収まり、観察することができます。

※ 秦野の読み方

「秦野」の読み方は、明治22年（1889年）の「傍訓町村名鑑」に秦野町（ハダノ町）、東秦野村（ヒガシハダノ村）などがあり、「ハダノ」と称している。

「波多野」については、寛永2年（1625年）の「東鑑」、享和3年（1803年）の「香雲寺文章」に書かれた「波多野」に「ハダノ」の振り仮名がついている。また「新編相模国風土記」の庄名中にも、「波多野（葉駄廼）」とあり、「駄」は「ダ」と読む。なお、「秦野市」の読み方は、市制施行時、総理府告示により、「ハダノシ」と定められている。

丹沢山地

丹沢は東西に40km、南北に20kmの範囲に標高1000～1600mの60の山々が連なります。神奈川県の面積の6分の一を占める広大な山域です。1700万年前頃、南の海に火山島が生まれ、フィリピン海プレートに乗り、北上して550万年～500万年前に日本列島に衝突、続いて200万年～100万年前に伊豆半島が衝突して、丹

沢山地が形成されました。最高峰は蛭ヶ岳（1625m）で現在も山体は成長を続けている。
丹沢山地の基盤岩は、海底火山のころ堆積した凝灰岩で、グリーンタフと言われている。南側の山々を表丹沢と呼び、東に大山（1245m）、北に三ノ塔（1245m）、塔ノ岳（1490m）、西に鍋割山（1272m）などが聳えています。この背後が西丹沢といわれ、丹沢湖があり、中川川、玄倉川、世附川が流れている。
丹沢が本州に衝突した直後115万年前ごろ当時の山地を突き貫くようにマグマが貫入して、冷え固まり深成岩となりました。こうしてできた岩石が丹沢の中央に見られる石英閃緑岩、トーナル岩、斑レイ岩です。

その貫入による熱や圧力によって、角閃石、結晶質石灰岩（大理石）、菫青石、ホルンフェルス、片岩などの変成岩が出来ている。西丹沢の結晶質石灰岩は、神奈川県の天然記念物に指定されているため採集できない。
なお、武田信玄の隠し湯「中川温泉」付近では角閃石や緑色片岩が見られます。

県立・命の星地球博物館、外来研究員の門田真人氏は、西丹沢の奥の加入道山でサンゴ化石とともにオウムガイ化石を採集しました。これら化石は南海の海底の生物であることから、丹沢の生い立ちが南の島であることが明らかになりました。さらに丹沢山地の各所に海底火山活動の産物である溶岩からなる枕状溶岩の15露頭が観察され、丹沢がかつて海底火山であったことが明らかになっています。
（つづく）
****

「了解日本」（「日本を知る」）　　俞彭年（85歳）

『第3回』

中国寺院・日本神社_相互の関係考察（上）

1・文化の伝承
　日本人はよく「中国古来の文化は日本文化の母である」と言う。古代中国の高度な文化は、朝鮮半島を経由したり、あるいは大陸から直接日本に伝わったり、日本では「渡来人」と呼ばれる朝鮮半島や中国大陸からさまざまな理由で日本に移住してきた人々によって、伝えられてきた。さらには中国留学または仕事で海を渡った日本人が帰国後、先進的な中国文化を広めた。徐福が何千人もの少年少女を率いて海を渡って日本に来たという伝説を思い出すが、この伝説はまったくの空論なのか、それとも

何らかの意味を含んでいるのだろうか。

日本は島国であり、人々は一種の島国根性を持ち、海外から伝播した先進的な文化を宝物として扱い、大切に長く保存し、事実上、海外文化を保護する宝庫のような役割を果たしている。そのため、発祥の地である中国から消えていった文化が日本に残っており、日本は古代中国文化を研究する上で貴重な歴史資料庫となっている。当然ながら、日本に伝わった文化の一部は、徐々に現地の文化と融合し、長い時間をかけて、適応と革新を加えながら、現在の日本のような独自の文化現象へと発展していった。

現在の日本の多くの文化は、中国文化とは大きく異なるが、よく見ると中国的な要素が残っており、中国大陸を起源とする同じルーツであることが分かる。その顕著な例が日本の神社であり、中国の神社と同じルーツを持ち、神を祀るために作られた古代中国の神社を起源とする。

紀元前 4 世紀以前は、日本では縄文時代と呼ばれる先史時代で、食物採集、狩猟、漁労経済の時代であった。紀元前 4 世紀から 3 世紀にかけて、日本の歴史は弥生時代と呼ばれ、中国の漢から東晋、十六国時代に相当する。この時代には、中国大陸や朝鮮半島から渡来した渡来人のもたらした高度な文化の影響を受け、農耕の導入、稲作、銅剣や槍、ドルフィンなどの金属器の使用、鉄の使用、織物技術の出現が見られるようになった。この時代のいわゆる「弥生人」は、実は「渡来人」と「在来人」が合体して生まれた混血の民族であった。

日本における最古の統一政権は、奈良盆地を中心とした 4 世紀（中国では東晋、十六国時代）に、この地域のいくつかの氏族が合併して誕生し、大王と呼ばれる選出された指導者が、日本史では倭政権とも呼ばれ、その後 8 世紀には大和政権と呼ばれるようになった。

6 世紀末には、上下関係の明確な氏族制度、隷属して生産・労働に直接従事する部民制度、大王を頂点とする支配秩序と税制、地方行政の国家体制が確立された。その結果、地方支配が強化され、権力構造が豊かになった。3 世紀から 7 世紀にかけては、日本史の中で「古墳時代」と呼ばれている。

2・霊を崇拝する習慣

神々への崇拝は、中国でも日本でも古くから行われてきたが、常に素朴な民間信仰であり、仏教やイスラム教、キリスト教のような組織的・体系的な宗教には発展しなかったので、仏典やコーラン、聖書のような古典は存在しない。

古代中国では、神を祀り、土地の神と祭祀を行う場所、期日、祭りを社と呼んでいた。日本では 6 世紀から 7 世紀にかけて（日本では古墳時代末期、中国では隋・唐の時代）、神を祀る特別な場所、それは神籬と呼ばれる神霊が宿るとして,常磐木で囲ん

で祭った場所、石で囲んで祭った磐境と呼ばれる場所が存在したと言われている。
日本人は、神々を拝むと思ったのだ。当時の日本人は、神様が天から地上に降りてきて、わかりやすい場所にある木や岩に取り付くと考え、取り付いたと思われる木や岩を神様と見立てて拝んでいたのである。

日本では、古代中国の「社」に相当する「神籬」があり、土地を社として囲い、それぞれの場所に木を植えて神を祀るというものである。日本では、祭祀の規模が大きくなり、複雑になると、神々のための仮の住まいである「社」(中国と同じ言葉だが、発音が異なり、意味も異なるので、伝来の過程で間違えたのか？)が作られるようになった。
6 世紀になると、仏教の僧院建築の影響を受けて、仮住まいはますます精巧になり、次第に常住となり、中国語で「社屋」、「社庙」、「社宮」に相当する「社殿」と改名された。社殿を所有するようになった神籬と磐境は次第に「神社」に変化していったのである。
日本の神社は神籬と磐境が進化したものであり、これらも「社」からも進化したものである。日本には、神社を持たずに本来の姿を保っている村落がまだ多くあり、それを「御社」と呼んでいるが、奈良県の大神神社や埼玉県の金鑽神社のように、神社と言いながら社殿を持たない神社もある。日本の神社は、中国の寺院のように大小、単純、複雑があり、その施設や構成も仏教寺院のような一定の形式はない。

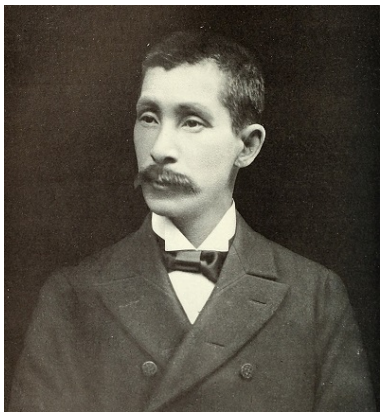
一般にまともな神社は、次のような基本施設で構成されている。「鎮守の森」、つまり中国の寺院のジャングルに似た神社林で、その広さは神社の面積を象徴的に表している。″鳥居″寺院の山門に相当する祖先のもので、2 本の柱を横に並べ、2 本の横木(1 本は冠木として 2 本の柱の上部に、もう 1 本は 2 本の柱の上部を貫く)を組み合わせた塔状の構造で、内側からここが神域であることを示す″銭形(せんがた)″。鳥居から神社に向かう通路で、「参道」と呼ばれる。″手水舎″は″水屋″、″水盤屋″とも呼ばれ、本殿前の「千灯」の先にあり、参拝者は柄の長い匙で手と口を洗い、身を清めた証とする。神社に向かう途中には社務所があり、多くの社務所ではお守りも授与されている。
社務所は「本殿」「拝殿」「幣殿」に分かれている。″本殿″はご神体やお祀りする神様を、″拝殿″は本殿の手前にあり、参拝者が神様を祀ったり取り除いたりするためのもの、″幣殿″は銭や絹を奉納するためのものである。
″藁縄″を白い紙垂で結び、鳥居や社殿、拝所、古木に掛けて神聖さを表すものである。″藁縄″の場所は侵入禁止であり、″藁縄″に触ってはいけない。又、″藁縄″には災害発生や邪悪な魂の侵入防止の役割もある。「摂社」、「末社」は御祭神以外の神様を祀っている小さい社(建物)であり、「摂社」は主祭神に関連する神や古来の土地

神を祀っており、「末社」は小さく"藁縄"を掛けている鳥居と本殿のみで、他の施設がない神社である。
日本では、神社は「社格」と呼ばれる階級に分けられている。一つは、平安時代初期（8 世紀以降）に、その施行規則である「延喜式」の「神名帳」が制定され、神社が「延喜式内社（神社）」として一元的に認知されたこと、つまり"式内社（神社）"は全部で 2,861 社あり、役所に出向く役人は必ずその地域の神社に参拝し、銭や贈り物を奉納することになっている。「式内社」でない神社の数は「式内社」の 5 倍と言われている。格式の高い神社を「神宮」と呼び、伊勢神宮、熱田神宮、橿原神宮、香取神宮などがある。（この項　つづく）

****

吉村昭著・「ポーツマスの旗」を読んでーその２ー　　臺　一郎 （74 歳）

少し若い頃の小村寿太郎



ポーツマス講和会議での小村（左から３人目）

ポーツマス講和会議レセプションの集合写真。最前列中央やや右の背の高い人物がロシア側全権ウィッテで、その右隣３人目の一際背の低い人物が日本側の全権小村

日露講和会議の会場については、ワシントンなどいろいろな場所が候補としてあがったが、こうした会議は部外者の少ない静かな環境で行うべき等の意見から、ボストンに近い軍港で避暑地にもなりつつあったニューハンプシャー州のポーツマスと決まった。

会議は 1905 年の 8 月 9 日の予備会議を経て、8 月 10 日に第 1 回の本会議が開催され、8 月 29 日に最終会議が行われた。この間必要に応じて両国の主席と次席の全権4名のみによる非公式の秘密会議が複数回開催された。

また、会議の参加者は、日本側の主席全権が外務大臣小村寿太郎、次席全権が駐米公使高平小五郎で、ほかに弁理公使佐藤愛磨、外務省政策局長山座円次郎、ワシントンの日本公使館の駐在武官など計 10 名が随員として参加した。小村は随員の選択に際して実力主義に徹し、地位や身分の上下よりも自分を確実に補佐してくれる人物を選定したという。

その他、会議の参加者ではないが、米国での外交工作やルーズベルト大統領との連絡・調整役として、大統領とはハーバード大学の同窓の友人であり、小村とも米国留学時代に同じ下宿で暮らした金子堅太郎元農商務相/司法相がワシントンに滞在して会議を側面から強力にサポートした。

一方のロシア側は、主席全権が小村より6歳年上の老獪な政治家で元蔵相のセルゲイ・ウィッテ、次席全権が駐英大使で開戦時の駐日公使のロマン・ローゼン、随員はプランソン外務省条約局長、フォードルウィッチ外務省顧問他、駐日公使館や駐英大使館付の武官等であった。

ちなみに主席全権の小村寿太郎は、1855 年に日向国飫肥藩の下級藩士の長男として生まれ、6 歳で藩校振徳堂に入学し 14 歳の時に首席で卒業した。藩は小村を東

京の大学南校（後の東京帝国大学）に留学させたが、そこでも小村は成績優秀で1875 年に明治政府による第 1 回海外留学生に選ばれ米国ハーバード大学のロースクールに入学した。

小村はハーバード卒業後ニューヨークの法律事務所に2年間勤務してから帰国し、司法省に入省したが直ぐに外務省に転じた。留学を経た小村の英語力は抜群で、後に英国の高官から「小村は英国の知識階級とほぼ同じように考え話すことが出来る」と賞賛されたという。

外務省では翻訳局勤務時代に外相陸奥宗光に見いだされ、清国公使館参事官として北京に着任し、その後臨時代理公使に昇進した。その優れた情報収集/分析能力は山縣有朋、伊藤博文などの元勲達からも注目された。日清戦争終了後は外務省政務局長に就任、その後外務次官、駐米公使等を歴任し、1901 年 47 歳の時に桂太郎内閣で外務大臣に抜擢された。

さて、ポーツマスでの講和会議は 8 月 10 日の第 1 回本会議で先ず日本側から講和条件として 12 ヶ条が示され、個々の条件毎に交渉することが合意されて、翌日に第二回本会議が開催された。本会議は全部で 10 回開催されたが、10 回目の 8 月 29 日の最後の会議で漸く日ロ両国は合意に達し、9 月 1.日に講和条約が締結された。

この間日ロ両国は、ロシアによる日本への賠償金の支払い問題及びロシア領となっていた樺太の割譲問題で、要求する日本側と拒否するロシア側が激しく対立し、第 9 回の全体会議では両国全権ともに「最早交渉の妥結は到底無理」と決裂を覚悟した。そうなれば満州の前線では戦闘が再開され、終戦は更に数ヶ月以上先になったであろう。

ロシア側の強烈な拒否の背景には、開通間もないシベリア鉄道を利用して満州戦線への兵や武器弾薬の補充が急速に進んだことに加えて、何よりも皇帝ニコライ二世が、アジアの新興国日本に対して、世界が英国と並ぶ最強の軍事大国と認める帝政ロシアが負けることをそのプライドが許さなかったという点もあったようだ。

但し、当時ロシア国内では各地で共産革命の動きが勢いを増しており、ロシア政府としても日露戦争を早急に幕引きして派遣軍を欧州に戻す必要に迫られていた。8 月 26 日の第 9 回本会議で小村は決裂を覚悟したが、その頃ニコライ二世はドイツ等の助言もあって、賠償金は拒否するが樺太の南半分割譲は受け入れる意向との情報が英国政府から日本政府経由で 29 日深夜に小村にもたらされた。結果 29 日の最後の本会議では、その線で日ロの交渉が行われ遂に講和が成立した。

「ポーツマスの旗」で著者吉村は 10 回に及んだ講和会議本会議の様子や全権同士による秘密会議での緊迫したやり取りを克明に描いている。本会議では、日本側

は主席全権の小村がほぼ一人で発言しているのに対して、ロシア側は次席全権のローゼンもしばしば発言しているが、その背景には全権小村の余人を持って代えがたい抜群の交渉力を、他の参加者が全面的に信頼していたという事情があったようだ。

日露両国ともに全権は国益を背負ってぎりぎりの交渉を行っており、会議ではお互いに自国側の弱さや安易な譲歩の姿勢を見せまいとして強気での厳しいやり取りを行った。そうした状況を知るほどに、戦争における終戦という幕引きの難しさを知り、武器もなく死傷者も出ないが講和会議も実は戦争の一部なのだと感じた。

主席全権小村寿太郎は身長僅かに 156 センチ。一方ロシア側の主席全権セルゲイ・ウィッテは身長 180 センチを超える大男。体格だけならまさに大人と子供だ。しかしイザ会議が始まりテーブルに着くと、小村は一貫して沈着冷静で論理的に発言し失言等も全くなく、的確な判断を瞬間的に下す外交交渉の天才で、そうした能力や資質が本会議に於いてもしばしば発揮されたという。そのことは本会議に出席したロシア側の随員や陪席者もたびたび証言している。

一方ロシア側の主席全権ウィッテはしばしば落ち着きと冷静さを失い、感情的になったために、かえって全権としての小村の有能さや優位性を際立たせてしまったようだ。そしてこうした状景を目にする度に、日本側の随員達は改めて小村が主席全権に選ばれた事の幸運とありがたさを感謝したという。

外交交渉は現場に立ち会う人間が何名もいるし、議事録が公式記録として今日に到るまで残され、新聞報道や雑誌の記事や写真等も当時のものが少なからず保存保管されていることから、実際の会議や舞台裏での全権や随員の様子がかなり正確に推察できる。「ポーツマスの旗」の著者の吉村は、当時の記録を克明に調べてこの本を執筆しているので書かれた内容はほぼ事実だろう。

日露戦争当時の我が国は人口規模で言えば現在の 4 割強に過ぎない。しかし講和会議の主席全権小村寿太郎、満州派遣軍の参謀総長児玉源太郎、連合艦隊司令長官の東郷平八郎、元老山縣有朋、同じく元老伊藤博文、総理大臣桂太郎、さらには対米交渉やルーズベルトとの連絡調整役の金子堅太郎、海軍大臣山本権兵衛などキラ星のごとき人材が現われて活躍したことで、日露戦争という未曾有の国難を乗り切ったのである。

ポーツマス講和会議から 120 年近い年月が経った。まるで皇帝のようなプーチン大統領に率いられたロシアはウクライナに侵攻し、ミサイルを撃ちまくり、それに対する西側の経済制裁によりエネルギー供給の不安定化と価格の高騰などが世界中に大迷惑をもたらしている。こんな現代にこそ、我が国には小村寿太郎の様な天才的外交官や政治家にいて欲しいと願うのは、自分だけではないだろう。

****

事　務　局

****

● **投稿歓迎**

****

天地シニアネットワーク事務局 （津田 孚人）

〒116－0001荒川区町屋3－2－1

ライオンズプラザ町屋703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電　話・FAX　　03-3819-7651